

クリスマス

—新しい母と子の物語—

奨励	中村 信博【なかむら・のぶひろ】
奨励者紹介	同志社女子大学宗教部長 同志社女子大学学芸学部教授 日本キリスト教団正教師

イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。

(ヨハネによる福音書 一九章二五―二七節)

明治時代のクリスマス

今から一三一年前のこととなります。一八七九(明治十二)年、十二月四日付けの朝日新聞に、「二十五日は耶蘇の大祭日なので信者を川口天主堂に集めて行事をする。」(この年に竣工した大阪市西区川口のカトリック川口教会か?)という記事が掲載されたことがありました。それは朝日新聞創刊の年で、ここに「耶蘇の大祭日」と書かれたクリスマスについて、朝日新聞が報じた最も古い記事だそうです(朝日新聞二〇〇八年十二月四日朝刊)。もちろん、これをもって、この時期に日本にクリスマスが定着したかどうか、簡単に判断することはできません。

けれども、その十七年ほど後のこと、一八九六(明治二十九)年になりますが、写真や写生といったヨーロッパにおこった自然主義的な作風を短歌や俳句において実践した正岡子規は、

八人の子供むつまじクリスマス

という句を詠みました。子規がクリスマスという言葉にどんな思いを込めたのか、素人の私にはよくわかりません。ただ、当時、子規が家族と一緒にクリスマスを祝ったという記録は見つかってはいないということですから、私の勝手な想像ですが、日本にクリスマスが次第に定着しはじめたころ、子規は、わが家には八人もの子どもがいて、その仲良くする姿は、教会のクリスマスに勝るとも劣らない穏やかで平和な喜びだ、と詠ったのかもしれませんが。ちなみに、子規には、「贈り物の数を尽してクリスマス」など、クリスマスを詠んだ句は五句あるそうです。いっぽうで、「病牀六尺」という随筆では、「一家団樂は平和の基だ」とも述べていますから(坪内稔典)、子規は、平和の基礎として仲の良い子どもたち、そして、一家団樂をクリスマスに託して詠もうとしたのかもしれませんが。

(「二〇〇一年十二月二十五日」『日刊：この一句 最近のバックナンバー』

http://sendan.kaisya.co.jp/ikkubak_1203.html アクセス2010.12.19を参照。)

クリスマスの平和

きょう私どもは同志社大学京田辺キャンパスのクリスマス礼拝とともに集うことができました。ルカによる福音書には、「いと高きところには栄光、神にあれ、／＼には平和、御心に適う人にあれ。」(ルカによる福音書二章一四節)という美しい歌声が残されています。それはクリスマスの喜びを告げる天使の歌声でありました。誕生したばかりのイエスが飼い葉桶の中に眠る姿を見守る喜び、そしてその幼子の姿のなかに、この地上における平和を読み取ることができるのです。まるで、赤ん坊イエスの寝息がすやすやと聞こえてくるような情景が浮かんで参ります。それが可能な時代、それが可能な時間、それが可能な政治、それが可能な社会、そして、それが可能な家庭を私たちは「平和」と呼ぶのかもしれませんが。

クリスマスは、その平和にふさわしい喜びの時です。いえ、たとえ、平和な時代でなくとも、人びとは生まれたばかりの赤ん坊が寝息を立てるような平和を求め、平和であることの大切さを心に刻んできたのでした。

9・11以降のこと

けれども、二〇〇一年九月十一日のアメリカにおける同時多発テロ事件以降、世界はまさに見せかけの平和のなかに晒されてしまったような長い時間を過ごして来ました。イラクや、アフガンだけではなく。インドでも、中国でも内戦やテロが次々と連鎖して新しい悲劇と犠牲とを産んでいるような気がいたします。日本の周辺でも尖閣諸島や北方領土の領有問題、そして朝鮮半島の緊張など、時計の針が逆戻りを始めてしまったのではないかとさえ思えてきます。

人類が「内政の不干渉」という国家間の原則をうた立てたのは、カトリックとプロテスタントとが激しく対立した一七世紀ヨーロッパにおこった三十年戦争のあとに締結された「ウエストファリア条約」であったとされています。すでに三六〇年も以前のことになりますが、人間の歴史は、それからずっとこの原則を遵守すべく歩んできたはずでした。

ウエストファリア条約は、どんなにお互いに正当な主張であったとしても、この場合にはとくに宗教にかんしてではありませんけれども、その主張によって互いの領土を侵してはならないことを取り決めた国際条約でした。そのことを考えますと、二一世紀にもなって、今もまだ、この世界がほんとうの意味での平和を実現することの困難のなかにいることを思わずを得ません。

マリアとヨセフ

イエスの母となったマリアと父となったヨセフの場合はどうだったでしょうか。イエス誕生の物語は新約聖書のなかに残されたマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという四冊の福音書すべてに記録されているわけではありません。ただ、マタイとルカだけがそれぞれに違った仕方です。イエス誕生の出来事を報告しています。しかも、興味深いのは、マタイには、聖霊によって神の子を身ごもった母マリアの悩みやためらい、迷いなどはまったく書かれてはいません。そのことが詳しく報告されているのは、ルカによる福音書だけです。ルカによれば、天使によって、救い主の母となることを知らされたマリアは、「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」(ルカによる福音書一章三四節)と、未婚であることを理由にその驚きを率直な言葉で告白しています。しかし、すこし違う見方をすれば、ここでマリアは、平和のしるしとしての幼子の誕生が告げられているのに、どうしてそのようなことがありえましょうか、と訴えているようにも読むことができます。極端な読み方ですが、ここにはマリアの不信心といいますが、平和なんてあり得ないと訴えているマリアのこころのなかが描かれているようにさえ読めてくるのです。

そして、ちょうどそのマリアに向かい合い、その悩みに共感し、その驚きを分かち合うようにして、マタイによる福音書においては、のちに夫となり父となったヨセフというひとの苦悩を書き留めています。マタイは「夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」(マタイによる福音書一章一九節)と書いています。

ルカには母となるマリアの不安が、そしてマタイには父となるはずのヨセフのためらいが書かれているのです。よくルカは女性を中心とした福音書で、マタイは男たちの福音書であると評価する人もいます。ルカは女性の立場で、マタイは男性の立場で書いているのかもしれませんが。けれども、二つの福音書を合わせて読んでみますと、マリアとヨセフの気持ちが痛いように伝わってきます。当時の一般的な結婚年齢から推測すれば、このときマリアはわずかに十四～五歳の少女であったかもしれません。そして、ヨセフもまた十八～九歳の若者に過ぎなかったこととなります。そんな二人が、まもなく生まれるであろう《いのち》のことで驚き、悩み、どのように親としてこの《いのち》に責任を負うべきかを考えているのです。近いうちに夫婦になるはずのこの二人の平和は、じつは、まもなくマリアに宿るとされた《いのち》のことで、揺れ動いていたのかもしれませんが。妙な言い方に聞こえるかもしれませんが、新しい《いのち》がマリアとヨセフの平和を破壊しようとしていたのかもしれませんが。そのことへの不安が、マリアの「そのようなことがありえましょうか」という叫びでもあったのです。

イエスが生まれたのは、この若い両親がガリラヤ地方のナザレという町から、南方ユダヤ地方のベツレヘムという町に住民登録のための旅を続けていたその途中のことでした。イエスは、平和どころか、旅の途中の若い二人の不安のまっただなかに産声をあげたのでした。若い夫婦の不安を、私たちは「宿屋には彼らの泊まる場所がなかったから」(ルカによる福音書二章七節)、幼子は飼い葉桶に寝かされた、という聖書の報告によって読み取ることができます。産湯をつかい、真新しい布にくるんであげたい、それが親となるひとの自然な気もちです。けれども、旅の若い夫婦には、家畜小屋、そして汚物にまみれた餌箱しか残されてはいなかったのです。二人はどれほど深く傷つき悩んだことでしょうか。「彼らの泊まる場所がなかった」。それは、新しい《いのち》が受け入れられない場所で、母となり、父とならなければならなかったということだからです。

ピエタ

ところが、幼子イエスを抱く母マリアの姿は、一般には幸福な母親のイメージと重ねられて受け止められてきたような気がいたします。それは、単純に母となった女性の幸福という意味にとどまりません。どんなことをしても誕生したばかりの《いのち》を守り通そうとする母としての矜持・誇り、あるいは使命感、それが幼子を抱く母マリアの姿でありました。しかし、それからおそらく三十数年後のこととなりました。誇らしく幼い《いのち》を胸に抱いたそのマリアは、今度は、十字架の上で残酷に処刑されたわが子の亡骸をその両手に抱き寄せなければならなかった悲しみの母でもあったことを忘れてはなりません。

現在もローマのサンピエトロ大聖堂の入り口の横に置かれているミケランジェロの有名な「ピエタ」と題された彫刻は、死んだわが子を胸に抱くマリアの悲しみを、気高いまでの美しさで表現しています。「Pieta」つまり敬虔な信仰、と題されたこの作品によって、ルネサンスを代表する偉大な芸術家であったミケランジェロは、マリアの深い信仰心を、かの女

の喜びや栄光ではなく、母としてわが子を失った、その喪失の悲しみのなかに表現しようとしたのでした。

ミケランジェロのピエタが不思議でならないのは、息子であったイエスよりも母マリアの方が若く見えることです。息子よりも若い母親というのは、理屈にあいません。けれども、私はミケランジェロの作品のもつその矛盾のなかに、長いキリスト教社会が、マリアを通してたんに母親であることや母性ということを超えて、人生そのものを深く学び、考え、経験してきたようすを読み解くことができるような気がしてならないのです。

息子イエスよりも若く見えるマリアの姿は、イエスを出産したばかりのマリアのイメージを連想させます。それは、クリスマスの日の母マリアの姿でありました。マリアは、いわば幼子と十字架に処刑された二人のイエスを、母として抱き寄せているのです。ミケランジェロのピエタにおいては、出産の幸福も、喪失の悲しみも、じつはまったく同じ次元に属する感覚であったのです。母という感覚で、と申し上げてよいでしょうか、その母の喜びと悲しみとして両者は理解されていたのではないかと私は考えてみるのです。

旧約聖書のピエタ

そして、イエスの時代よりもずっと昔のことでありました。旧約聖書には、ラケルと呼ばれた一人の母親の悲痛な最期が記録されています。ラケルもまた身重の体で、長い旅をつづけた女性でした。そのお腹のなかには二人めの子どもが宿っていたのです。ただ、かの女の結婚生活はかならずしも幸福であったとはいえません。夫のヤコブにはもう一人の妻がいて、しかもそれはラケルの実の姉でした。しかも、姉さんにはつぎつぎと六人もの子どもが恵まれたのに、ラケルにはやっと一人の子どもが与えられただけでした。夫との強い絆を信じようとしても、それを信じることを許さない現実と、出産こそは女性の義務であるかのように考える周囲の目に耐えかねるようにして、ラケルは夫とともにかれの故郷へと向かったのです。長い旅は、かの女の辛く悲しかった半生そのものの象徴でもありました。

心身ともに疲労しきっていたラケルにとって、出産は自らの《いのち》と新しい《いのち》との交換を意味したかもしれません。男の子を出産したラケルの最期の言葉は、「この子の名前は、ベン・オニ・・・」。わが子命名のその言葉が、かの女の辞世となったのです。ラケルは《いのち》の最期、その残された力のすべてをこめて、わが子に「ベン・オニ」と命名したのです。しかし、それは「悲しみの子」という意味でした。ここには、マリアとは対象的に、わが子をその胸に抱いてあげることのできない母の悲しみを読みとらなければなりません。母となるひとにとって、わが子を抱くことも抱けないことも、深い悲しみ、文字通り断腸のおもいゆえのことであるのです。その悲しみは、むしろ慈しみのゆえであり、また、母の愛そのものであったはずでありました。

母によって「ベン・オニ」と名付けられた子は、すぐに父ヤコブによって「南方で生まれた子」という意味で、「ベニヤミン」、正確には「ベン・ヤミン」であります。母によって「ベニヤミン」と名前を変えられてしまいました。「悲しみの子」というのでは、いかにも不吉な感じがしたのかもしれませんが。そこに、最期の言葉さえも消し去られてしまったラケルの悲しみがいっそう印象深いのです。それは、旧約聖書創世記三十五章に書かれた物語でありました。

悲しみの母

こんなふうには聖書を読んでまいりますと、クリスマス、それは喜びのときというよりも、むしろ深い悲しみの季節なのかしらん、とさえおもえてきます。言葉には尽くせないこのころの悲しみのなかに、まもなく、幼子イエスがお生まれになろうとしているのかもしれませんが。恐ろしい想像ですが、ひょっとして、マリアは喜びをではなく、悲しみを生んでしまったのかもしれないのです。そう考えたとき、いま、私たちは神の子、幼い《いのち》のためになにを祈り、なにを為し、そしてどのようにして、この新しい《いのち》、その悲しみを私たちのこの時代に迎えることのできるのでしょうか。

ヨハネによる福音書には、きょう読んでいただいたところですが、「イエスの十字架のそばには（母マリアと何人かの親しい女性たち）が立っていた」（一九章二五節）と書かれています。受難曲をはじめとする多くの宗教曲に登場するラテン語の「STABAT MATER」（立ちつくす母）という曲は、このとき、十字架の上で絶命したわが子を思う母マリアの言葉に尽くせない悲しみを歌っているのです。悲しみをこらえてなお、生涯を神と人びとにささげて生きたわが子イエスを気丈に見届けようとする母の思いの深さが描かれているのです。

新しい母と子

ヨハネによる福音書によりますと、イエスは処刑のために磔にされた十字架の上から、つまり、これもイエスの辞世であったこととなりますが、母マリアとかれが愛した弟子の一人を見て、まずはマリアに「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言い、そして次に愛する弟子に向かって「見なさい。あなたの母です。」と互いを確認させています。日本語では、「御覧なさい」、「見なさい」というようにイエスが相手を選んで言葉を変えているように訳されていますが、原文ではまったく同じです。とにかく「ちゃんとごらんください」というのです。しっかりとお互いに見てみれば、お互いに目の前にいるのは、まったくの他人であったり、かかわりのない人ではなくて、その目の前にいる人が「あなたの母であり、息子なのだ」とわかるはずだ」というのです。ふたりはイエスに深くかかわったことによって、赤の他人であるのに母であり、息子になるのだというのです。

私は、そこに愛の原型といえますか、私たちの愛の姿がこのときのイエスのいわば遺言によって、鮮やかに示されているような気がしてなりません。イエスのこの言葉の故に、私どもは、互いによく見つめ合い、理解し合うことで、母でない者が母となり、子でない者が息子となることができるのです。母でない者が子ではない息子を愛し、息子ではない者が母でない母を愛するその不思議な愛の形のなかに、イエス・キリストの愛が豊かに示されているのです。聖書には、「そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。」と書かれています。これも、正確に読んでみますと、原文には「家」という言葉はありません。直訳いたしますと「自分のところに引き取った」と訳すべきところなのです。それは、この弟子はイエスの母にこのときから、責任を負うようになったという消息を伝えているのです。イエスの死によって初期のキリスト教の呼びとは、聖書のこの新しい「母と子の物語」のゆえに、互いに愛する者を家族のように大切に考える歴史を歩み出したのでした。

ケノーシスの神

新約聖書のフィリピの信徒への手紙二章六一八節には、「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」と書かれています。

それは、神は無防備で、丸裸の、そしてそのためにとても無力で弱い者として、この世に人となられたという、クリスマスのメッセージでもありました。つまり、イエス・キリストの本質はまるで丸裸の赤ちゃんのようだ、というのです。それは、《自分を無に》され、人間の奴隷となられた神の姿でもあったのです。神ご自身が自らを打ち砕き、自らを粉砕して《無》となられたのだというのです。それはご自分の意思によって、自己を否定し、絶対であるはずの神の特性といえますか、その立場、あるいは性格をご自分で否定されたということです。このときの自分の力を否定して《無になる》、新約聖書が書かれたギリシア語ではケノーといいますが、その名詞形では《ケノーシス》といわれ、伝統的なキリスト教の思想においては、古くから《ケノーシスの神学》として理解されてきました。そのケノーシスとは、自らを「打ち直」し、破壊し、無にされて、私たち人間の前に寝息を立てる赤ん坊の姿と同じものである、と聖書は教えているのです。

それはまず第一に、この無力な《いのち》を守る責任が私たちに負わされていることを教えてくれているのではないのでしょうか。そして二つめに、そのために必要な力、丸裸の赤ん坊を守る力、それは愛の力と呼ぶべきかもしれませんが、その私どもの愛の力を、じつは神こそが求めておられる、私どもの愛を神様が信頼しておられるということを教えてくれているのです。

イエスの愛する弟子が、悲しみの母マリアを自分の母として引き取ったように、自らを打ち砕かれて飼葉桶に眠る幼子には、無力な《いのち》にたいして応答する責任が求められているのです。それは、ほかのだれにたいしてでもなく、きょうこのクリスマスの礼拝に集った私たちに求められている無力な者、弱さを抱えて生きる者、いえ、私たちの社会において弱さを強いられる人びとへの愛ということなのかもしれません。

それが神によって求められる愛だとすれば、この求められる愛によってこそ、私どももまた、新しい「母と子の物語」、その愛の物語を紡ぎ出しながら生きる一人ひとりでありたいところから願う者でございます。